

21 世紀文明研究セミナー

東日本大震災における美術品の被害と修復

2012.2.17 兵庫県立美術館 江上ゆか・横田直子

1 「文化財レスキュー」とはー阪神・淡路大震災から東日本大震災へ

(キーワード)

文化財レスキュー事業：

阪神・淡路大震災においては「阪神・淡路大震災被災文化財等救援事業」。

東日本大震災においては「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業」。

後者の場合、全国美術館会議ほか13団体が構成。事務局は東京文化財研究所内。

全国美術館会議：

1952（昭和）年設立。2011年5月現在、364館（国立8館、公立228館、私立128館）の会員館と31社の賛助会員で組織されている。

保存ワーキンググループ（現・保存研究部会）あり。

2 石巻文化センターの被災美術品等 救援活動の概要

3 陸前高田市立博物館の被災美術品等 救援活動の概要

4 一時保管場所（仙台、盛岡）での応急処置について

5 まとめ、意見交換

文化財レスキュー —全国美術館会議の活動に 参加して—

田中千秋

美術館の周縁

1 レスキューが実施されるまで

兵庫県立美術館が加盟する全国美術館会議（以下全美）は1995年の阪神淡路大震災の際、地震が発生すると直ちに美術品救援活動を独自に開始した。その後文化庁の呼びかけにより結成された「阪神淡路大震災文化財等救援委員会」にも参加し、被災した文化財等を避難、一時保管する「文化財レスキュー事業」に多くの学芸員を派遣した。さらに、その経験をふまえて1998年には「大災害時における対策等に関する要綱」を発効させて災害に備えてきた。今回の東日本大震災はこの要綱が実施される初めてのケースである。

3月11日の地震発生直後から全美事務局は要綱にのっとり、被災が予想される地域の加盟館に向けメールとファクスを送り連絡を試みた。それと同時に会員館の学芸員が構成する全美研究部会のメンバーたちも情報を収集し、3月18日ころには情報が出そろった。会員館被害状況が第1報（3月16日）、第2報（3月18日）と更新される中、宮城県石巻市石巻文化センターだけは情報収集中、つまりは連絡が取れないままだった。

震災より3週間経った4月7日になって石巻文化センターの職員と連絡が取れ、救援要請が全美事務局に出された。全美は要綱により対策本部を設置、文化庁の「文化財レスキュー事業」（注1）として救援活動が実施されることが決まった。

石巻文化センターは2階建ての複合施設で、旧北上川河口から200メートル足らずのところに位置する。絵画・彫刻・民具・考古資料など約10万点の収蔵品があり、そのうち絵画・彫刻約200件のレスキューを全美が担当した。いつ来るかもしれない余震と津波を警戒して、文化センターでは速やかに作品を梱包し、安全な一時避難場所に移動させて応急処置するという方針のもとレスキュー活動は行われた。

2 石巻文化センターで

4月27日朝、私を含む全美派遣の学芸員6名と協力運送会社の3名は車1台とトラックに分乗し、文化センターに到着。関係者（注2）とミーティングの後、建物の中に入り状況の説明を受けた。津波は1階天井まで達し、美術作品のための第2収蔵庫はその威力に耐えられず本来外開きの扉が内側に倒れて海水が浸入した。とこ



石巻文化センター

ろが、重要文化財が納められる隣の第1収蔵庫の頑丈で気密性の高い扉はびくともせず内部は高さ2センチの浸水で済んだという。

初日は彫刻作品から作業を進めた。多くの作品は近くの製紙工場から流されてきた紙の原料、パルプの固まりが大量に付着しており、時間が許す範囲でブラシや割り箸で除去して梱包し、作業終了後翌日からの移送まで収蔵庫で保管した。

28日からは梱包作業が順調に進んだので、当初の方針を変更して絵具の剥落を避けるために表打ちを始めた。

計画当初は29日の移送後、ゴールデンウィークが明けてから応急処置を開始する予定だった。だが実際に作品を前にしてみると、すぐに処置を始めなければ絵具の剥落は進み、すでに発生している徴は増殖、状態悪化は避けられないことはだれの目にも明らかだった。このレスキューに掛かる準備段階で地元の方々はどうな思いで行方不明者の捜査の続く瓦礫と化した街を進み、文化センター建物内で作品や資料と混ざり合った大量の流入物を片付け、我々を迎えてくれたのだろうか。それにこたえる思いが我々を突き動かしたのだと思う。移送後の30日から5月3日までなんとか日程に都合の付く私ともう一名が居残り応急処置をつけることになった。

29日になると濡れたままの紙作品も加わった。その場で処置できないスケッチの束は変形と急速な乾燥を避けるためダンボールではさみ密封梱包、マップケースのデッサンはケースごとそのまま密封梱包して宮城県美術館の倉庫へ移送し、優先的に処置することとした。また、翌日からの応急処置に横田学芸員（当館保存修復グループ紙作品担当）の参加が決まったのはこの日の朝のことだった。

3 仙台で

30日からは東北芸術工科大学の教授や同大学OBが加わり彫刻の応急処置を、私は上記の1名と組んで油彩画の表打ちを行った。午後からは横田学芸員と東京から日帰りして駆けつけた修復家によって、紙作品の応急処置も開始された。5月3日で私たちは仙台を離れたが、その後も引き継ぎを行いながら応急処置と一時保管場所の環境改善が継続された。6月末日までに、全美加盟館から39名の学芸員、全美賛助会員の輸送会社4名、全美から要請された5名の修復家、それに東北芸術工科大学関係者6名と学生5名、東北大学の教授1名と学生12名が参加した。8月現在、一部の作品は別の施設に移送され、次のステップの処置を待っている。

これらの作品がそう遠くない日に石巻市で公開されることを心から祈っている。

（たなか・ちあき／当館保存修復担当学芸員）

（注1）正式には「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」という。全国美術館会議他13の団体が構成する。

（注2）石巻市教育委員会、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、宮城県立美術館、仙台市博物館、文化庁、国立文化財機構の職員が4月20日から26日の間建物内の瓦礫の撤去を続けた。



裏打ち作業中の筆者



デッサンの処置作業中の横田学芸員